

Masanori ISHII interview

「自分を知るために、 とりあえずやってみる」

俳優・タレントの石井正則さん。お笑いコンビ「アリオキリギリス」としてデビューして以来、俳優、ナレーター、声優と、多方面で活躍されています。2015年に大好評だった朗読公演の再演の前に「気になったら、とりあえずやってみる」という石井さんの生き方や、朗読の面白さについて伺いました。



お笑い芸人から俳優へ きつかけはすべて「縁」

——お笑い芸人を目指されたきっかけは？

「バラエティー番組が好きで、高3のとき、急にこの世界に入りたい！って思っちゃったんです。友達はみんな就職する中で事務所に入ったんですが、舞台上に立ってない人はほとんど辞めていって、僕と相方だけが余っちゃった。それで、お前らとりあえず組め！」と言われてライブに出たんです。コンビ名は「まにあわせ」(笑)。意外と笑いが取れたから続けることになって、コンビ名を考えなくちゃいけないから、部屋の中にあるものを片っ端からメモしていったんです。その中に太宰治の『きりぎりす』が入っていた。それを見た担当者が、ちっちゃいのと大きいのだから、アリオキリギリスでいいじゃん、はい決まり！という感じで動き出したんです(笑)」

——その後、バラエティー番組「ポキャブラ天国」でのブレイクがきっかけで、テレビドラマ「古畑三郎」に出演されたんですね。

「三谷幸喜さんが『ポキャブラ天国』での僕を気に入って声をかけてくださいました。それまで俳優をやりたいという気持ちは

全くなかったですね。思えば、アニメの声優も、ナレーションも朗読も、やってみないと声をかけていただいたことがきっかけ。自分にとって分からないから、最初から決めつけないで、縁があれば、とりあえずやってみます。結果的に、自分では思ってもみなかったお仕事ができるように、周りの人が、僕らしさを見出してきている。俺は芸人だ！ってこだわっていたら、今の僕はなかったかもしれない」

好きなものに出合うコツは 気軽にやってみて 気軽にやめてみる

——お仕事も幅広い石井さんですが、喫茶店巡り、自転車、フィルムカメラ、読書など、その多趣味ぶりが注目されていますよね。

「仕事とも繋がりますが、気になったら、とりあえずやってみます。それで、合わなかったらすぐやめちゃう。始めたからには続けなきゃと思うから、始められないんじゃないかな。もっと気軽にやってみていいし、やめてもいい。僕、最短20分でやめた趣味があるんです、オカリナ(笑)。ルービックキューブは2か月だったなあ…。やめてしまった趣味が、しばらくして復活する

こともありますしね。そうして何度もトライ&エラーを繰り返すと、俺、これをやるという気持ちになるんだ。って自分が見えてくる。そして、深く好きになれるものが残っていくんですね」

小説は設計図 朗読は建物を建てること

——5年ぶりの春日井公演となる「Sound of Story」は歌とピアノ・パーカッションとの共演による新感覚の朗読劇。石井さんが思う朗読の魅力を教えてください。

「朗読って、写真を撮ることと似ているんです。全く同じ小説や被写体でも、読み手やカメラマンによって印象が大きく変わります。小説という設計図をもとに、建物を建てていく感覚なんです。ただ文字を読んでいるだけだと、平面的になってしまうので、読み方や、リズムや音色、色んな要素を組み合わせて、舞台上に立体的な情景を立ち上げていくのが一番面白いところなんです。会場の空気によっても、生まれる情景は全く違うものになります。初演の時も、東京と春日井ではお客様の反応が違ったのが興味深かったですね。今回も春日井のお客様と一緒に、一から新しい舞台を作っていくのがとても楽しみです」



石井さんの思い出の一冊
『斜陽』
太宰治／新潮文庫

コンビ名の由来でもある太宰は全て読んでいますが、一番好きで何度も読み返しているのが「斜陽」。太宰の自己表現と、読者を楽しませようというエンターテインメント性がいちばん拮抗している作品だと思います。



宝くじ文化公演
石井正則 Sound of Story
～朗読と音楽で綴るコンサート～
2020/2/16@ 13:00～

詳細情報は、裏表紙で Ticket Guide